

令和 3 年 8 月 19 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02251

研究課題名（和文）「大正デモクラシー」の総合的研究

研究課題名（英文）The comprehensive research of TAISHO Democracy

研究代表者

田澤 晴子（TAZAWA, Haruko）

岐阜大学・教育学部・准教授

研究者番号：40737160

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：インタビュー調査は、6名の研究者に依頼し4名の方から承諾を得た。当初の方針は主に戦後の「大正デモクラシー」研究を牽引され、調査者が研究上の影響を受けて来た研究者の方々を候補とした。書籍や論文の背景となる執筆当時の社会認識、問題関心等を語ってもらうことを目的とした。この方針により1940年代から60年代までの研究者ご本人の幼少期から学生時代の体験、影響を受けた人々に関する貴重な証言を得ることが出来た。また、同志社大学人文科学研究所『社会科学』に3名のインタビュー記録を掲載することが出来た。さらにインタビューの全記録をまとめ、「大正デモクラシー」に関する調査者の研究論文を冊子にまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インタビュー調査の結果、各人の「大正デモクラシー」「吉野作造」「丸山眞男」「アジア認識」に対する考え方を比較することができ、共通点および相違点を明らかにすることができた。また1930年代に対する歴史認識や戦後民主主義に関する考え方が研究方法および内容に深く関わっていること、所属する大学や研究会などを基礎とする学問的な共同体が存在し、個人が発する問題関心や研究視角も属する研究機関の「伝統」、人間関係、講義やゼミとの関係のなかで育成されてきた側面があることが明確になった。論文の土台となるような政治的・社会的諸体験を拝聴できたのは大きな収穫だった。

研究成果の概要（英文）：The interview survey was conducted by requesting 6 researchers and obtaining consent from 4 researchers. The initial policy was mainly driven by the postwar "Taisho Democracy" research, and the researchers selected researchers who had been influenced by the research. The purpose was to have people talk about social awareness, problem interests, etc. at the time of writing, which is the background of books and treatises. With this policy, I was able to obtain valuable testimony about the researcher's childhood to student experience and the people who were influenced by him from the 1940s to the 1960s. In addition, we were able to publish the interview records of three people in the "Social Sciences" of the Institute of Humanities, Doshisha University. In addition, all the interview records were compiled, and the research papers of the researchers on "Taisho Democracy" were compiled into a booklet.

研究分野：日本近現代思想史

キーワード：インタビュー 思想史 政治学 政治思想

1. 研究開始当初の背景

2014年4月に大正デモクラシー再検討の会を田澤晴子、平野敬和、藤村一郎により結成。戦後の「大正デモクラシー」研究の動機と時代状況との関わりを検討するため、代表的な研究者へのインタビューを主軸にしながら、今後の「大正デモクラシー」研究の方向について考察することを目的とした。背景に「大正デモクラシー」の実在が問い直され、「改造」、「革新」など新たな概念による把握が登場すると同時に社会的な保守化の進行で「デモクラシー」概念そのものが問い直されてきたため、原点の研究動機や研究内容に立ち帰る必要に迫られたからである。

2. 研究の目的

「戦後」デモクラシーとして議論されてきた「大正デモクラシー」研究の初発の動機、思想状況を把握することで研究の背景にある時代認識や思想状況、学界の状況を明らかにすることで、「大正デモクラシー」研究の意義および成果、そして今後の課題について明らかにする。

3. 研究の方法

インタビューする研究者に関して、当初の方針は主に戦後の「大正デモクラシー」研究を牽引され、調査者が研究上の影響を受けて来た研究者の方々を候補とした。書籍や論文の背景となる執筆当時の社会認識、問題関心等を語ってもらうことを目的とした。この方針により1940年代から60年代までの研究者ご本人の幼少期から学生時代の体験、影響を受けた人々に関する貴重な証言を得ることが出来た。掲載しなかった内容も多々あるが、研究者ご本人の自分史を拝聴する機会を得たことは調査者それぞれに深い印象を残した。ただし、質問状送付直後に逝去の報がもたらされた場合、またお断りになった場合もあった。松尾尊兌、松本三之介、三谷太一郎、飯田泰三、鹿野政直、木坂順一郎の各氏にインタビュー依頼を計画し、実施できたのは、松本、三谷、飯田、木坂の四氏である。

4. 研究成果

インタビュー調査にあたっての「大正デモクラシー」研究の見取り図は下記のようなものであった。下線はインタビューを実施できた研究者

- ①マルクス主義関係（信夫清三郎、井上清、木坂順一郎）
- ②近代政治学関係（松本三之介、三谷太一郎、飯田泰三）
- ③社会運動・民衆史学（松尾尊兌、鹿野政直）
- ④ナショナリズム・「革新派」研究（伊藤隆、有馬学）

①は講座派中心の「大正デモクラシー」の批判的研究の代表格である。1950年代の信夫清三郎の研究がその象徴である。今回のインタビューにより、②③の研究が①を前提とし、その反論を目的の一つとしていることが確認できた（松本氏、三谷氏の記録）。一方、①の枠組みのなかで、木坂氏の革新倶楽部論は「大正デモクラシー」の可能性を論じており、それは京都の研究会や人脈からの影響であることがインタビューから推察された（木坂氏の記録）。また、②では丸山眞男、竹内好の影響力と、「生命」「生きる」「価値の転換」など哲学的な認識や課題が研究に通底している点が印象に残った（松本氏、三谷氏、飯田氏の記録）。

また、戦後民主主義と「大正デモクラシー」との関係についての認識は研究者により異なっている。両時期を「戦後」の思想と捉え、大衆民主主義時代における政党やリーダーシップを論じる三谷氏は、「大正デモクラシー」を高く評価している。「生きる」という価値を戦後の根源的な思想をすることで戦前期との断絶を論じられた松本氏は「大正デモクラシー」にやや批判的である。これに対し、「昭和マルクス主義」を大正思想の帰結とし「昭和ファシズム」への展望を論じる飯田氏、「天皇制絶対主義」から「ファシズム国家」論へと転換した木坂氏は、「大正デモクラシー」と「ファシズム」との関係性への関心が強いように感じた。

また、インタビューを実施し、所属する大学や研究会などを基礎とする学問的な共同体が存在していることを実感した。個人が発する問題関心や研究視角も、属する研究機関の「伝統」、あるいは人間関係、聴講した講義やゼミとの関係のなかで育成されてきた側面がある。研究を支える背景となる課題意識が、こうした記録から明らかにできるのではないかと思う。

最後に、③の鹿野政直による「大正デモクラシー」の質を問う研究を基点として、1930年代の国家体制や思想への展望をもつ④の研究者にはインタビューすることは出来なかった。これは1930年代に関する研究準備が調査者に不足していたのが原因である。今後の検討課題として、戦後の歴史・政治・思想史学界における研究共同体の課題継承についての検討、「大正デモクラシー」と戦後民主主義の複雑な関係性を架橋する1930年代研究の再考の必要が挙げられる。

研究発表

(1)日本思想史学会大会パネルセッション「大正デモクラシー」の再検討（2015年10月18日）吉野作造の満蒙論（藤村）、石橋湛山のアジア論（平野）、柳田国男とアカデミズム（田澤）に関

する研究発表を行った。その内容は、平野敬和・藤村一郎・田澤晴子「大正デモクラシー」の再検討」(『日本思想史学』48号,2016年9月30日)へ。

(2)同志社大学人文科学研究所第8研究会(2017年2月24日)にて「大正デモクラシー」研究の再検討 松本三之介・三谷太一郎氏の業績を中心に」を報告(田澤晴子,平野敬和)

(3)研究報告(田澤晴子・平野敬和・藤村一郎の共著)

「松本三之介氏インタビュー記録 日本政治思想史をふり返る」

同志社大学人文科学研究所『社会科学』47巻4号(2018年2月,解説平野)に掲載

「三谷太一郎氏インタビュー記録 「大正デモクラシー」研究をふり返る」

同志社大学人文科学研究所『社会科学』48巻2号(2018年8月,解説平野)に掲載

「飯田泰三氏インタビュー記録 近代日本政治思想史をふり返る」

同志社大学人文科学研究所『社会科学』49巻4号(2020年2月,解説平野)に掲載

「木坂順一郎氏インタビュー記録 近代日本政治史をふり返る」

大正デモクラシー再検討の会編『大正デモクラシー』の総合的研究』(2021年3月)に掲載

研究会等の開催

2014年

4月 研究会結成

8月 松本三之介氏論文検討会(久留米大学)

9月 松本三之介氏インタビュー1回目(マイスペース中野北口店)

12月 松尾尊兌氏へのインタビューを書面で依頼(同月逝去)

2015年

7月 松本三之介氏インタビュー2回目(MS&BB 池袋西武横店)

同日,日本思想史学会大会準備報告会

10月 日本思想史学会大会最終準備の会合

2016年

9月 三谷太一郎氏論文検討会(名古屋大学)

11月 三谷太一郎氏インタビュー(東京大学)

2017年

4月 科研「大正デモクラシー」の総合的研究」基盤C獲得(田澤代表)

5月 今後の計画の検討会(同志社大学)

8月 松本三之介氏インタビュー記録作成・検討会(名古屋大学)

9月 鹿野政直氏論文検討会(久留米大学)

11月 鹿野政直氏へインタビューを依頼(断念)

2018年

2月 三谷太一郎氏インタビュー記録確認と検討会(同志社大学)

7月 飯田泰三氏論文検討会(岐阜大学)

9月 飯田泰三氏インタビュー1回目(千葉市飯田氏宅)

12月 同上インタビュー2回目(同上)

2019年

2月 飯田泰三氏インタビュー記録確認と検討会(鹿児島大学リエゾンオフィス・東京)

6月 木坂順一郎氏論文検討会(鹿児島大学リエゾンオフィス・東京)

7月 木坂順一郎氏インタビュー(龍谷大学)

9月 木坂順一郎氏インタビュー記録検討会(鹿児島大学リエゾンオフィス・東京)

2020年

2月 科研成果報告書のための検討会(鹿児島大学リエゾンオフィス・東京)

8月 研究成果報告書の内容検討会(Zoom)

11月 研究成果報告書の内容検討会(Zoom)

2021年

3月 研究成果報告集発刊(120冊を各所に配布)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 田澤晴子/平野敬和/藤村一郎 | 4. 巻 49 |
| 2. 論文標題 飯田泰三氏インタビュー記録：近代日本政治思想史をふり返る | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 社会科学 | 6. 最初と最後の頁 283 305 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/pa.2019.0000000642 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 田澤晴子・平野敬和・藤村一郎 | 4. 巻 47 |
| 2. 論文標題 松本三之介氏インタビュー記録 日本政治思想史研究をふり返る | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 社会科学 | 6. 最初と最後の頁 127 152 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 田澤晴子・平野敬和・藤村一郎 | 4. 巻 48 |
| 2. 論文標題 三谷太郎氏インタビュー記録 大正デモクラシー研究をふり返る | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 社会科学 | 6. 最初と最後の頁 307 331 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 田澤晴子・平野敬和・藤村一郎 | 4. 巻 47 |
| 2. 論文標題 「松本三之介氏インタビュー記録-日本政治思想史をふり返る-」 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『社会科学』（同志社大学人文科学研究所） | 6. 最初と最後の頁 127-152 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 田澤晴子、辻本諭、古田修一朗、早川万年 | 4. 巻 66 |
| 2. 論文標題 高大連携の視点からみた歴史学習の課題 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告=人文科学= | 6. 最初と最後の頁 19-26 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 「大正デモクラシー」再考 吉野作造と原敬を中心に」 |
| 2. 発表標題 平野敬和 |
| 3. 学会等名 岩手史学会大会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 藤村一郎 |
| 2. 発表標題 「吉野作造とクロボトキン：『吉野作造政治史講義』を活用して」 |
| 3. 学会等名 日本政治学会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 平野敬和 |
| 2. 発表標題 「大正デモクラシー」研究の成果と課題 三谷太一郎『近代日本の戦争と政治』第 部 (岩波書店、1997年) を中心に」 |
| 3. 学会等名 同志社大学人文科学研究所研究会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 藤村一郎 |
| 2. 発表標題 「彼らをどうするのか？久留米収容所とマイノリティ」 |
| 3. 学会等名 久留米大学公開シンポジウム（招待講演） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 藤村一郎 |
| 2. 発表標題 「吉野作造の東アジア政策論 「帝国」論とヘゲモニー理論との連関において |
| 3. 学会等名 第二次東アジア日本研究者協議会国際学術大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計4件

| | |
|---------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 藤村一郎・後藤啓倫（共著） | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 有志舎 | 5. 総ページ数 320 |
| 3. 書名 吉野作造と関東軍：満蒙権益をめぐる民本主義と統帥権の相克 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 平井一臣、土肥勲嗣、原清一、宇野文重、池上大祐、渡邊智明、山田良介、花松泰倫、藤村一郎、篠原新、遠山隆淑 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 法律文化社 | 5. 総ページ数 250 |
| 3. 書名 つながる政治学 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 田澤晴子 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 309 |
| 3. 書名 吉野作造と柳田国男 大正デモクラシーが生んだ「在野の精神」 | |

| | |
|-----------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 黒川 みどり、山田 智、田澤晴子他 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 有志舎 | 5. 総ページ数 328 |
| 3. 書名 竹内好とその時代 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 藤村 一郎 (FUJIMURA Ichiro) (00441717) | 鹿児島大学・総合科学域総合教育学系・准教授 (17701) | |
| 研究分担者 | 平野 敬和 (HIRANO Yukikazu) (10571573) | 岩手大学・教育推進機構・准教授 (11201) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|